

マハティール、首相やめるってよ

～危惧されたポスト・マハティールを巡る対立が顕在化、一方で政治の成熟化が進まない実態も露わに～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
 主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522)

(要旨)

- マレーシアでは24日、マハティール首相が国王に辞表を提出した結果、次期首相就任までの暫定首相となった。一昨年の総選挙ではナジブ前政権の汚職体質を批判するとともに、恩讐を超えてアンワル氏と共闘して政権交代を実現した。しかし、総選挙で公約としたアンワル氏への禅譲の時期が大きくずれるなか、政権内での「ポスト・マハティール」の動きの先鋭化を受け、マハティール氏は政治的打撃を最小化すべく辞任した。
- 今後は新政権樹立に向けた動きが活発化しようが、アンワル氏は十分な政治基盤を有さない。他方、アンワル氏と袂を分かったアズミン氏が主導する野党結集案も見通しが立たない。地方政党などを中心にマハティール氏の続投を求める声も多く、明確な姿勢を示さないことが反ってマハティール氏の影響力を高めている。結果的にマハティール依存の背後で同国政治の成熟化が進まない実態が露わになったとも捉えられよう。

マレーシアでは24日、一昨年の議会下院（代議院）総選挙を経て15年ぶりに首相の座に返り咲いたマハティール（Mahathir）氏が国王に辞表を提出した。国王は辞表を受理した上で同氏を次期首相が就任するまでの暫定首相に任命しており、一昨年の総選挙を経て同国では独立以来初めてとなる政権交代が行われるなど、政治に生まれた大きな『うねり』は一旦頓挫する格好となった。一昨年の総選挙では、マハティール氏が率いるマレーシア統一プリブミ党（PPBM）と、かつてはマハティール氏の腹心ながらその後宿敵となったアンワル（Anwar）元副首相が率いる人民正義党（PKR）、そして華人政党の民主行動党（DAP）及びイスラム政党の国民信託党（AMANAH）などと希望連合（PH）を形成し、マハティール氏が首相の座への返り咲きに成功した（詳細は一昨年5月10日付レポート「[マレーシア、独立後初めての政権交代へ](#)」をご参照下さい）。マハティール氏がかつての恩讐を超えてアンワル氏と共闘して政権交代を実現した背景には、ナジブ前政権下での汚職体質に加え、当時の最大与党統一マレー国民組織（UMNO）内の権力闘争に敗れる形でマハティール氏が同党を追い出される格好となったことも大きく影響したと考えられる。なお、マハティール氏は選挙戦を通じて将来的に首相の座をアンワル氏に『禅譲』することを公約に掲げたほか、首相に返り咲いた後には同性愛行為を巡る有罪判決で収監されていたアンワル氏に対する恩赦を実現し、一昨年秋の補選でアンワル氏が政界復帰を果たすなど（詳細は一昨年10月15日付レポート「[マレーシア、アンワル氏政界復帰で注目される「禅譲」の行方](#)」をご参照下さい）、その後は禅譲の時期に注目が集まる展開が続いてきた。しかし、マハティール氏は首相の座に返り咲いた後は一転して禅譲の時期を曖昧にする状況が続いたほか、同政権で経済相に就任したアズミン・アリ（Azmin Ali）氏は元々アンワル氏の側近ながら、政権内で『ポスト・マハティール』として頭角を現すなど新たな火種となる可能性が高まっていた。さらに、今年と同国がAPEC（アジア太平洋経済協力）のホスト国であるため、マハティール氏は禅譲の時期について今年11月に

開催予定の「APEC首脳会議後」とする考えを示す一方、具体的な時期については「私の考え次第」と曖昧な態度に終始する姿勢をみせてきた。こうしたなか、マハティール氏による任期満了を主張していたアズミン氏は副党首を務めていたPKRから除籍されたことをきっかけに、10名前後と新たな政党を結成することを明らかにするなど、アンワル氏の『追い落とし』を先鋭化させた。さらに、アズミン氏は自身が新たに作る政党とPPBM、そして、最大野党であるUMNOを中心とする「国民戦線」、総選挙を前にPHを離脱して第3極となったイスラム主義政党の全マレーシア・イスラム党(PAS)などと新たな連立を組む構想を明らかにしたことで、アンワル氏との対立が決定的となった。なお、足下の同国経済は中国で発生・大流行中の新型コロナウイルス(COVID-19)による悪影響が懸念される状況にも拘らず、経済相であったアズミン氏が対策そっちのけで政権再編に明け暮れる動きをみせたことは少なからず国民からの失望を招いている。また、上述のように前回総選挙で政権交代が行われた背景には、長年に亘る国民戦線政権の下での汚職体質などが影響したにも拘らず、アズミン氏が国民戦線と手を組む考えをみせたことで、アンワル氏及びその周辺は「国民への裏切り行為」との批判を強めており、結果的にアズミン氏にとって分が悪い状況となっている。こうしたことから、今回のマハティール氏の辞表提出は、批判の火の粉が自身に降り掛かる事態を避けることで政治的ダメージの最小化を図った『打算的な動き』と捉えられても仕方がないと言える。他方、こうした事態に陥った元凶は総選挙での勝利に向けてアンワル氏への首相禅譲を掲げつつ、自身が首相に返り咲いた後にはその時期を明言せずのりくらしとした対応に終始してきたマハティール氏自身にあることは間違いない。

今後については、現行憲法上では議会下院で多数派を形成することが出来れば新政権樹立が可能となるものの、仮にそうした取り組みが困難であれば再び総選挙が行われる可能性もあるなど、当面は新たな連立協議の行方に注目が集まることになる。現時点においてアンワル氏自身は新政権の樹立に動く意向を明確にしていないなか、国民からの厚い人気などを勘案すれば同氏を中心になって動く可能性は高い一方、上述のアズミン氏による離反を受けてアンワル氏が総裁を務めるPKRの議席数は39議席に留まるなど基盤の脆弱さは否めない。また、アンワル氏は辞表提出前にマハティール氏と会談して慰留に努めるなど両者の関係は断裂状態となった訳ではないほか、アンワル氏の妻であり政権内でナンバー2の副首相を務めたワン・アジザ(Wan Azizah)氏はマハティール氏からの信頼が厚いとされるなど、同氏を軸に新たな政権構想が築かれる可能性もある。他方、PHを離脱したPPBM及びアズミン氏は上述のように野党共闘による政権構想を模索しており、仮に実現出来ればPPBMのムヒディン(Muhyiddin)総裁などが次期首相候補となる見通しとなる。しかしながら、いずれの枠組においても政権樹立に必要な条件(議会下院での多数派形成)にはほど遠い状況にあるなか、PH内のDAPや少数派の地域政党などからはマハティール氏の続投を除く声が少なくないなど、マハティール氏が態度を明確にしないことで反って自身の影響力が高まる事態となっている。マハティール氏を巡っては、長期に亘る政権運営とその影響力の高さを称賛する声が少なくない一方、後任を育てることが出来なかったことへの批判も少なくないが、一連の動きはその悪い部分が一気に噴き出したものと捉えられるとともに、同国の政治がマハティール依存の背後で成熟化出来ていないことを図らずも露わにしたと言えよう。

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。